

# U-NITS vol.4

U-NITS：「研修観の転換」に向けて NITS が挑戦している様々な取組について発信し、全国のみなさまと「新たな教職員の学び」の協働開発を図るためのメールマガジンです。

## I) NITS からの提案（第一次）の公開

### 「研修観の転換」に向けた NITS からの提案 （第一次）～豊かな気づきの醸成～

本年4月に、「「研修観の転換」に向けた NITS からの提案（第一次）～豊かな気づきの醸成～」を公表しました。これは、「研修観の転換」に向けた令和4年度からの試行錯誤を踏まえた NITS としての「気づき」をもとに、全国の研修担当者とともに教職員研修の質を上げていく上で、手掛かりになるのではないかと考えている発想や考え方を、「共通言語」として提案するものです。

今回の提案は一つの「仮説」であり、「研修観の転換」に向けた対話のきっかけになればと考えています。また、教職員研修について学び合う際の一つの教材として御活用頂けると有難く思います。

本件の詳細及び資料・動画は当機構ウェブページより御覧いただけます。また、よろしければ、お読みいただいた御感想や御質問をフォームにお寄せください。



▼<https://www.nits.go.jp/about/strategy/#suggestion>

## II) 実践記録の紹介

NITS では、職員が、自らの試行錯誤を振り返り、「実践記録」として綴ることを推奨しています。

現在、「文部科学教育通信」にて隔週で連載されている当機構審議役佐野壽則による記事「「研修観の転換」に向けた教職員支援機構の挑戦 “研修を、面白く”」を掲載しています。今後、随時、綴られた「実践記録」を公開していきます。

▼<https://www.nits.go.jp/about/strategy/#report>

## III) 令和6年度研修マネジメント力協働開発プログラム（全国版）

研修マネジメント力“協働開発”プログラム（全国版）（以下、マネプロ全国版）。昨年度まで“育成”としていたところを“協働開発”といたしました。研修に悩みながら取り組んでいる全国の仲間と協働して開発していきたいという思いからです。

今年度は6月、10月、2月の3回にわたり、オンラインにて実施します。6月は、「求められる「新たな教職員の学び」とその展開」「協働の学びの展開と実践コミュニティの発展」をテーマとして、講義、資料読解、グループセッションでの対話や検討等を通じて思考を深めていく研修デザインとしました。

参加者の感想です。

「一人一人の学びが共有されることで、新たな学びや価値が生まれると研修を通して実感しました。休憩時間や研修後に研修での気づきや学びを同僚に話したくて仕方がなく、聞いてもらいました。共に同じ時間を過ごし、共に考えることを大切にしたいので、仲間を増やしたいと思っています。」

この研修のファシリテーターには昨年度の参加者にも御協力いただいています。学び合った仲間同士がつながることで新たなサイクルが生まれ、研修についての考えが深まることを期待してお願いしました。協力してくださった方から、次のような感想が寄せられました。

「自分のファシリティにはもっとこうすればよかったと反省しきりですが、自分にも伸びしろがあるかもしれない！と前向きに捉え、もっと学び

を深めていこうと思います。私はこの後、新任教頭研修会を運営します。会の半分以上は、協議と情報交換です。また、新たな教職員の学びを考える指導主事の研修会も計画しています。どのような学びが生まれるか、ワクワクしています。」

U-NITS vol.2でご紹介した、マネプロ全国版についての文章を再掲いたします。

「新たな教職員研修」を立ち上げることは骨が折れる取組です。その時仲間がいるということが大きな力になるように思います。マネプロ全国版にご参加いただき、そこででの経験、そこで生まれたつながりから、全国の研修担当者の創意工夫に溢れたアクションが各地で生まれ、互いの実践に学びながら、日本津々浦々の教職員の「主体的・対話的で深い学び」につながるような大きな「新たな教職員研修」のうねりを一緒に作っていきませんか。

#### IV) 「研修観の転換」に向けた自治体との協働

当機構では、特別研修員<sup>\*1</sup>を通じて、多くの教育センターとともに研修の協働開発を進めています。

今回、京都府と高知県で実施された研修について、研修を担当した特別研修員2名からの報告です。

##### ①京都府総合教育センター（2024.05.17）

特別研修員 大崎 康央

京都府総合教育センターでは、「新たな教職員の学び」に向けた探究型研修の開発を目指しています。その一環として、令和6年度は「探究的な学び講座シリーズ」を実施します。

「探究的な学び講座シリーズ」は、6月（集合）、10月（オンライン）、1月（オンライン）のインターバル型の研修（年3回）です。自己紹介を含

む80分の対話を皮切りに、資料を読み込んでの対話、リフレクションと、今までの講義中心の研修講座ではありません。本研修では、「対話」に非常に大きな役割を持たせています。そのため、グループワークには、ファシリテーター（センター所員）を加えることにしました。

6月の研修に向けて、4月と5月には、①全所員で探究型研修を体験しイメージを共有すること、②実際にファシリテーターとなり、当日のワークに向けて準備することの2つを目的に所員研修を実施しました。

##### ■第1回所員研修 4月

○対話を通した学び（講師：大崎）

※研修時間 105分（説明等 15分、対話 80分、リフレクション 10分）

##### ■第2回所員研修 5月

○資料を通した学び（講師：NITS職員）

※研修時間 120分（説明等 20分、資料の読み込み 40分、対話 50分、リフレクション 10分）

センター所員自身が、探究型研修を通して、受講者はどのように学び、どのような感想を抱くのか、そしてその中で何を感じ、考えるのかを体験することは、重要であると考えています。学びの「観」の転換は、研修に参加する教職員だけでなく、研修を企画するセンター所員自身にも求められているからです。変化を求められると不安になったり、少し抵抗感を感じたりすることもあります。この所員研修を通して我々は、渦中に巻き込まれ、試行錯誤することの大切さに改めて気付く機会になりました。

次は、研修講座において、学校の先生方を探究の渦中に巻き込んでいきます。新しいスタイルの研修ですから受講者の反応に不安があるのは事実です。しかし、NITSでの特別研修員としての1年間の経験から、チャレンジへの不安は、仲間との協働やリフレクションによって、今までと異なる自分に気付けるチャンスになると学びました。こ

の不安と対峙した結果、研修が終わった後の自分がどのようになっているのか楽しみです。

## ②高知県教育センター（2024.05.28）

特別研修員 大石 裕千

高知県では、今年度より、20年目の教諭、養護教諭、栄養教諭を対象に、「省察・対話・探究」をテーマに年間計4回実施するインターバル研修を試行実施しています。第1回目はオンデマンド研修として、「研修の意義・概要等」、「教育の動向、高知県の求める教員像」、「新たな教師の学びの姿の実現」の3本の動画を視聴しました。

第2回目と第3回目は集合研修、第4回目はオンライン研修です。

第2回の集合研修を終えた受講者からのアンケートには、「対話することで、自分では気づけていないことを引き出してもらい、新たな気づきにつながりました。また、校種が違う先生方との対話を通して、共通の悩みがあったり、視野を広げたりすることができました。」などの感想をいただきました。後日談ですが、当センターの職員が受講者の在籍する学校へ訪問に行った際、学校長より「参加した先生が、思っていたよりずっと楽しい研修だったと言っていたよ。」と報告してくれました。参加者によっては、自己の「在り方」についての豊かな気づきがある研修となったのではないかと考えています。

最後に、昨年度のNITSでの経験を踏まえ特に大切にしていきたいことが2点あります。

1点目は、受講者に「どのような変化を実感させたいか」という研修の目標・目的を明確にすることです。

2点目は、研修運営側が研修前及び研修中の受講者の姿をどれだけ具体的に想像できるかということです。

そのためにも研修をデザインしていく上で、目標・目的設定を最優先とし、それを基に研修の内容、研修の過程・方法を設定していくことを大切にしていきます。そして、研修の内容、過程・方法に悩んだときは研修の目標・目的に立ち返ることを大切にしながら、研修デザインを研修担当者全員で協働探究していきます。

### \*1) 特別研修員

令和5年度よりNITSが立ち上げた、「『新たな教職員の学び』協働開発推進事業」において、各自治体より派遣される研修員のこと。基本的に、1年間はNITSに勤務し、NITSの研修担当者として研修のデザインにあたるとともに、派遣元の研修デザインにも参画する。2年目は派遣元に戻り、NITSと連携しながら、研修観の転換を進めるための実践に取り組む。

※このメールマガジンは、教育委員会、教育センターの方々を中心に、全国で教職員研修に携わっている方々に向けて配信しています。教育委員会、教育センターの職員やご関心がありそうな方々に、広く共有いただけると幸いです。

独立行政法人教職員支援機構  
教職員の学び協働開発部 連携推進課